みらるるの日もあるべきか。（北岡壽逸）

フェーアチャイルド著「人口の數と質」

People, The Quantity and Quality of Population by Henry Pratt Fairchild, 1939, New York, Henry Holt and Company, pp. 315

「若し北米合衆國の出産率が、今世紀以來の減退率を以て今後も減退して行くならば、一九七五年頃には一人の赤坊も生れなくなるであらう。他方に於て日本は既に七千萬の人口を有する上に、尙年々百萬の人口を加へ、その增加し行く人口に對する生活資料を獲得するために支那に於て荒れ狂つて居る。ムツソリニは世界に對して伊太利人は多産國民であり、多産國民は偉大なる國民であり、エチオピヤやアルバニヤの如き二三の遲れたる國の征服は世界を支配するに必要なる飛石であると豪語して居る。ヒツトラーはキーキー聲を張り上げて獨逸民族の優秀なこと、他の群小民族は凡てその恩惠的支配の下に服すべき事を絶叫して居る」

是が前米國人口協會會長フェーアチャイルド氏の新著「人口の數と質」の冒頭の書き出しである。本書は著者の學問的著述と云ふよりは通俗的の書である。引用も極めて廣く、圖解も多く、固より正確なるものではあるが、引用の根據は凡て之を示さず、興味本位に書かれてある。流石に斯界の一權威の書丈に問題の取扱方が廣くして、偏したと思はるゝ點は少しもないが、一定の主張を有する書物でもない。人口問題の全般を興味本位に理解せんとする人には好箇の手引たるも、人口理論にも、人口學說にも何物かを貢獻するために書かれたとは思はれない。從つて讀んで面白いがさて紹介文を書かうとすると一寸困る本である。先づ本書の結構を示すために、その目次を書かう。本書は十三章に分つ。

第一章　最も重要な問題——人口問題の解題である
第二章　生めよ殖えよ——主として動物の世界に於ける繁殖の事實を說く
第三章　人類の原始的發生
第四章　人口の數——主として人口統計の話である
第五章　マルサス、是か非か
第六章　如何に人口は增加するか
第七章　何故に人口は存續するか——産兒制限の話
第八章　最適人口論
第九章　人口の將來
第十章　人口は幾何を以つて足るか
第十一章　移民問題
第十二章　人口の質
第十三章　優生問題
第十四章　結論

第八章乃至第十章及結論の章が、やゝ本書の內容の特質でもあり　主張

でもある樣に見受けらるゝが故に、その概要を紹介する。その中心問題は人口政策の目標如何、換言すれば人口は增加を計るべきか、制限すべきかと云ふ點と、人口の將來如何、換言すれば人口は減少の傾向があるか、增加の傾向があるかと云ふ問題である。

最適人口の問題に關して彼は曰ふ、『世に人口過剩又は人口過少と云ふ問題があるならば、その標準として兩者の中間に適當の人口と云ふものがある筈である。然し實際にこの問題を把握する事は頗る難い』と、そして歷史的に見れば殆んど凡ての社會は人口增加を計り來つた事を述べ、その理由として次の如きことを擧げて居る。

第一　軍事上の理由、然し人口の多き事が國强き唯一の原因に非ずとして、日本が遙に人口の多い支那を打ち破つた居る事を擧げて居る。

第二　宗教的理由、凡ての宗教は膨脹發展を喜ぶ。

第三　王朝的理由、政府又は王朝は人民の增加を喜ぶ。

第四　事業主は低廉にして豐富なる勞力を得るために人口の增加を喜ぶ。

第五　人種的利己心。

第六　人口の增加する民族が强力にして精力ありとの思想。

第七　凡て大を喜ぶ心、（Megalomania）

その中第一の軍事的理由のみが合理的なる人口增加を望む理由なりと言ふ。

右の如く國家は常に人口の增加を望むにも拘らず、個人は必ずしも心より之に協力せず、墮胎及避姙が常に行はれて居る。社會としては人口の增加を欲するが、個人としては必しも然らざる所に一の矛盾を認める。民族の强大——或は軍事的に、或は產業的に、或は文化的に——を欲する者は常に人口の增加を欲するが、人口の大さに關するその外の標準としては生活程度の問題がある。

人口の數は二面に於て生活程度に影響を及ぼす、第一に人口が多くなればその社會の有する自然富源の一人當りは減ずる。他方に於て一定の經濟文化を維持するためには一定の人口を要する。然し幾何の人口が最高の生活程度を維持する所以であるかに就て具體的の數字を得ることは困難であるとする。

人口政策の目標の問題に就て彼の强調するのは、人口の增加は國防上、國の安全のために必要であるとしても、同時に、人口の增加が國の膨脹を必要とし之がために戰爭の危險に導き、國防を一層必要とする（二一九頁）とし、人口の增大が戰爭に導く事例として日本を擧げ、日本の膨脹發展を必要ならしむ最大の動因は人口增加にありとし、この點につきトムプソンが「人口問題の危險區域」に於て主張したのと全然同一の主張をして居る。其處で本問題卽ち政策の目標として人口の增減如何の決定は將來の世界が戰爭か平和かに依つて定まるとして居る。彼自身は平和を望んで居る事は云ふ迄もない。

次に自然現象としての將來の人口の增減如何の問題に就て、彼は過去に於ける人類の增殖を極めて大きく分ち、人類のこの世に發生して以來、西紀一八〇〇年迄、百萬年の間に世界の人は九億になつたにすぎない。その後百三十年の間に二十一億卽ち倍加したとて、最近百三四十年の人口增加の著しき事を說き、パール（Pearl）等の述べたロヂストィック法則（Logistic Law）を述べて人類は外界よりの障害物の發生する迄は等比級數を以つて增加するとする。然し彼は近時の產兒制限の普及を當然の現象とし、今や人口の增減は自然の現象に非して、人が計畫的に行うものなりとし、

人口の增加するや否やは家族が產兒制限をなさゞるを得ざるが如き狀況におくや否やにありとして居る。然し一部の論者の恐るゝ如く、產兒制限の故を以つて出產は無限に減少するものとは考へず、米國の出產率も一九三五年をどん底とし、爾來漸次增加の傾向あるを示して、その點に就ては寧ろ悲觀說を排して居る。

然し一方に於て死亡率に就ては今後增加する傾向のある事を說いて居る。この事を示す爲に過去に於ける死亡率の減退を分析して如何なる點よりも過去の趨勢の將來に持續すべからざる事を示してゐる。卽ち從來の死亡率改善に最大の貢獻をなしたものは乳兒死亡率であつて、野蠻社會に於ては乳兒死亡率が五〇%と云ふが如き事も決して珍らしい事でなく、現に一九〇〇年に於てマサチュセッツ州のローエルでは出生千中二七五・五、フォール・リバーでは出生千中三〇四・七と云ふが如き高率を見たのであり、一九一五年には米國全國で出生千中一九九・九と云ふ高率であつた。然るに一九三七年には全國で五四・四と云ふ好成績で今迄のすばらしき向上に驚くべきと共に今後多く期待し得られざる事を知るべきであるとして居る（一七一頁）更に死亡を原因別に調べて一方に於て驚くべき減少を示したものと何等減少せず却つて總死亡中の百分率では增加したものとを揭げて居るが、その表は米國に於ける衞生の進步と同時にその限界を示すものなるが故に左に揭げる。（數字は總死亡中の千分率である）

病名	一九〇〇年	一九三六年
繰蟲	一二・五	一・〇
猩紅熱	一〇・二	一・九
百日咳	一二・一	二・一
ヂフテリヤ	四三・三	二・四
下痢及腸炎	一三三・二	一六・三
先天奇形及乳兒病	九一・八	四九・七

是等の激減したものは凡て乳幼兒の病氣である。然るに他方に於て老人病は左表の如く寧ろ增へて居る。

	一九〇〇年	一九三六年
癌及惡性腫物	六三・〇	一一一・〇
腦溢血及腦軟化	七一・五	八一・二
心臟病	一三二・一	二二七・九
腎臟病	八九・〇	八三・二

この事は人は小兒病で死ななければ老人病で死なねばならないと云ふ當然の事を示すにすぎない。（一九四頁及一九五頁）此處で一寸驚くのは殺人、自殺、自動車事故と云ふが如き病氣以外の死亡の增加せる事である。殺人は一九〇〇年には人口十萬人中二・一であつたのが、一九三五年には八・三となり、自殺は一九〇〇年には一一・五であつたのが、一九三五年には一四・三となつて居り、自動車事故による死亡が一九〇〇年には少くて獨立の項目とならなかつたが、一九三五年には二八・二と云ふ重要死亡原因となつて居る。（一七五頁）

小兒病は減じ得ても、老人病は減じ得ないと云ふ事は社會の進步に依る壽命の延長には限りのある事を示すものである。過去に於ける米國の平均壽命を見るに、

一七八九年	（マサチュセッツ州の調査）	三十五年
一八五〇年	（同上）	四十年
一九〇一年	（十州）	五十年
一九三八年	（全米國）	六十二年

と誠に驚くべき成績を示して居るが、「その調子で進步するとする今後五十年には米國人の平均壽命は八十年になる」と云ふが如き新聞記事的の學

者の論は全く空言にすぎない。長壽者に就て見ればその壽命は野蠻國も文明國も殆んど差はなく、文明國に於ては夭折者を防いだにすぎない。人の壽命そのものを延したのではない。現に六十歳以上のものに就て見れば、殘存壽命は寧ろ減少して居るのを見る（一九七――一九九頁）

斯くて著者は死亡率は將來寧ろ增加すると見る。その說明として第一に擧げて居るのは年齡構成の變化である。卽ち死亡率低き、年若き階級が比較的減少して、死亡率高き、老人階級の增加する事である。第二は人口增加の停止する事である。同一の死亡數の存する場合に人口增加する國では分母が大となるが故に比率は小となるに反し、人口停止國に於ては分母が小となるが故に比率が大となるとし、佛國に於て死亡率高き故に人口の停止せると同時に、人口停止せるが故に死亡率が高いと云ふ（二〇三頁）。

然らば死亡率は如何なる程度迄上るか、その標準を示すものは平均壽命である。靜止人口に於ては平均壽命を以て千を除したるものが人口千人當りの死亡率である。卽ち平均壽命が六十歳ならば死亡率は一六・六でなければならない。今後米國の死亡率はこの程度迄上ると云ふ。停止人口の下に現存の死亡率千人中十一を維持するためには平均壽命は九十歳を超えなければならない。斯くの如き事はあり得べからざる所なりと云ふ。斯くて著者は今後死亡率の增加によりて人口の減少すべき事を豫斷し、クチンスキーの提唱した再生產率の計算に依る將來の人口減少說を肯定して居る。然し彼は之を以つて悲しむべき現象と見ず現時世界の各國は大體人口過剩なるが故に、先づ人口の增加の抑制を計り、之に依りて戰爭危險の防止と共に生活程度の向上を計り、人口減少のために生活程度の引下げ、又は現在經濟文明の維持困難なるを見るに至れば又人口增加を計ること容易なりと云ふ。之に反して、現在人口の增加を計つて過剩人口を見るに至れば、人口の積極的の減少を計ることは至難なりと云ふ。（二九二頁）

最後に彼は戰爭及生活程度の低下は人口過剩の產物なりとし、從來の社會の方針は人口の增加を自然に委せて、その增え行く人口に適應するため一切の努力をなした。今や人口の增減は人爲的に調節し得る所なるが故に、社會的福祉の標準を定めて、之に伴ふ樣に人口增加の方式を定むべきであると云ふ、然し人口政策の根本方針は戰爭か平和かの問題の解決如何に依るとし、先づ人は戰爭を避け平和を維持するの方策卽ち社會の根本的改造を計るに非れば、人口の質の問題も數の問題も調整するの由なしと、之を以つて彼の書を結んで居る。（二九四頁）

本文冒頭に揭げた如く本書は通俗的の書物であつて新たなる研究の發表でもなく、新說を提唱するものでもない。詳細な統計よりは圖表を用ゐ、論述廣範にして偏せず、人口問題に關する通俗書としては最良のものと云ひ得るであらう。（北岡壽逸）

明治三年調全國人口（庚午年概算）（埋め草）

戸數		七、〇五八、九六一軒
內譯	華族	四〇四
	士族	二三一、八六六
	卒	一九四、五三八
	社	四四、九五三
	寺	三五、七三四
	平民	六、五五一、四二六
人口		三二、七九四、八九七人
內譯	男	一六、七三三、六九八
	女	一六、〇六一、一九九